きたかみNPO通信

んだょねっと

No.15
2007.10.1
発行

「んだょねっと」は北上地方（北上市、西和賀町）を中心とするＮＰＯの情報誌です。「んだょ」は北上地方で「そうだ」等の相槌の意味。「ねっと」は「ネットワーク」を示します。発行は3月、6月、9月、12月の年４回。市民活動を取り巻く動きや各団体の活動情報などをお届けし、皆さんの活動をサポートします。

Zoom Up

平成19年に創設された市民提案型協働事業「コラボ☆チャレンジ」に2件の事業が採択され、9月から事業がスタートしています。

一つは未就学児童の遊び場を提供する「かけっこ体育館」、もう一つは芸術公演のサポートスタッフを育成する「芸術公演活性化事業」です。

詳しくは、P5報告で紹介します。

Main Contents

P2 提言
見せかけの「協働」は百害あって一利なし

P3 報告
地域づくり講座

P4 報告
「展勝地・景観まちづくり実験」・「まちちゃり事業」

P5 報告
市民提案型協働事業「コラボ☆チャレンジ」

P6 団体紹介
「広瀬川まちづくり倶楽部」

P7 NPOリレートーク
「ピュー・アニマートの会　鈴木雅子さん」

P8 NPO基本講座
「コーディネーターとファシリテーター」

見せかけの「協働」は百害あって一利なし

髙橋 敏彦
（いわてＮＰＯ-ＮＥＴサポート 代表理事）

コピー天国の某国では、ブランド物の時計やカバン、衣類、テーマパークまでもコピーが氾濫し、報道のタネはまだまだ尽きないようです。わが国でも耐震偽装や食肉の偽装、つい最近では有名なお菓子までもが消費期限を偽装していたようです。どうやら私たちは確かな目でしっかりと「見せかけ」を見破らなければならないようです。

最近では、NPOや協働の世界でも同様の「見せかけ」現象が起きつつあるように思われます。「NPO」や「協働」が毎日のようにメディアに報じられているので、これらの言葉を使ってさえいれば「良い施策」といった錯覚があるのか、これが本当に「協働」なのかと首を傾げたくなるようなものが見られるようになりました。岩手県内にはまだこのような自治体はないものと信じていますが、「見せかけ」協働の一例を紹介したいと思います。

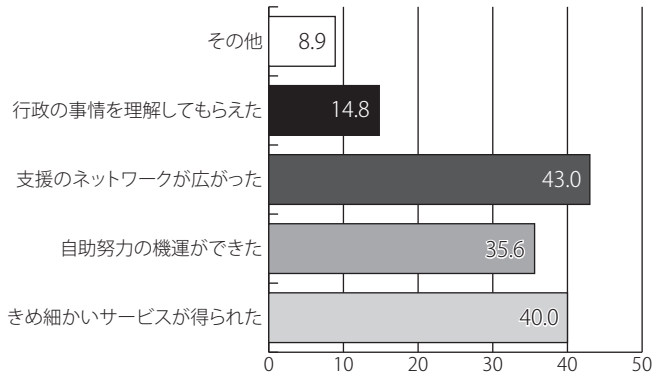
「○○○市民会議」のような存在をよく耳にしますが、中には行政が都合の良いニーズや合意を作り上げるために設置したのではないかと疑いたくなるものもあります。それを見破るのはそう簡単ではないのかもしれませんが、都合の良いニーズや合意形成の作られ方を少しでも知っておくことは重要かもしれません。第一に、そのような市民会議は意志決定や合意形成のための会議をなかなか開きません。個別に電話や訪問等で、所謂、根回しをしながら、いかにも合意を得ているかのように説明会や議会答弁に利用されます。その中の常套句は「○○の皆さんも了解していますから」などといった言い回しをしながら反論し難い状況を作りだしています。第二に、単なる説明会や講演会にもかかわらず、フォーラムと称して都合の良い講師を招き、「さくら」に都合の良い質問をさせます。都合の悪い質問者が手を上げても指名せず、最後は時間切れと言って質問を打ち切ります。

これらはつまり、施策に自信がないことを自ら示しているだけであって、いくら「協働」に見せかけたとしても、なんとなく空々しく見えてしまいます。もし施策に自信があるのなら、市民を信じて堂々と議論を展開し、説得するぐらいの気構えがほしいものです。そして本気で「協働」をやろうというのであれば、正面から正攻法で市民と向き合い、市民をぜったいに巻き込むぞといった覚悟が重要だと思います。特に市民生活に密着し、市民の協力が必要な分野では欠かせない姿勢だと思います。なぜなら、すでに市民はそれに応えるだけの能力を備えていると思うからです。

「協働」による一番の効果は、受益者である市民が自分たちの力を知り、何とかしようという自助努力の機運が醸成されることです。さらには課題を解決するためのノウハウやネットワークが、関わった全ての人たちに蓄積されることです。すなわち良い「協働」は、その後の施策をかならず遂行し易いものに変えてくれるのです。この事は「んだょねっと11号」でも報告したとおり、昨年度の岩手県による調査(図－1)によって示されています。報告書には「協働」のためのいくつかの条件も盛り込まれており、このことを共に学びながら、少しでも早く、より良い「協働」が出来るようになって行きたいものです。

改めて、見せかけの「協働」は百害あって一利なし、ということをしっかりと肝に銘じておきたいと思います。

図－1 H18年度県民協働型外部評価結果より
協働による受益者側効果（複数回答）



自治組織のための地域づくり講座スタート

高橋　隠至
（いわてNPO－NETサポート 理事）

平成19年９月18日（火）に公開講座を開催し、本年度の「自治組織のための地域づくり講座」がスタートしました。この事業は昨年に引き続きいわてNPO－NETサポートが北上市から委託を受けて開催している事業です。

皆さんご存じのとおり昨年度から北上市の公民館が地区交流センターとなり、住民自治組織による運営となっております。そしてこれまでの生涯学習事業に加えて地域づくりも自治組織が担うことになりました。

本事業は、地区交流センターを運営する自治組織の役員や職員を対象に、住民参加を基本とした地域計画や地域づくり事業の企画の作り方、会議のもち方などの運営ノウハウを取得することを目的に企画した事業です。

昨年度は、ワークショップ形式の会議の技法、住民に参加してもらう企画の作り方をテーマに、実習を交えた３回の講座とフォーラムを開催しました。そして本年度は、昨年度の事業企画に対して事業評価をテーマにした２回の講座と「住民自治を支える組織としくみ、地域計画」をテーマに講演とフォーラムを開催します。

第１回目となる公開講座は、日本現代詩歌文学館講堂にを会場に、櫻井常矢氏（高崎経済大学地域政策学部地域づくり学科准教授）を講師に招き「住民自治を実現する組織としくみづくり」と題して、講演をいただきました。全国的にも注目されている「住民自治による地域づくり」。なぜ今、「住民自治」なのか？ その必要性について改めて理解を深めました。また、住民自治において、地域計画（地域のあるべき将来像）づくりが、いかに重要なものであるかなど、住民自治推進のポイントを全国の他地域の事例を交えて学びました。

第２回目と第３回目は、地区交流センター職員および地区役員を対象に実習を交えた講座で、現在行っている各事業に関しての「事業評価」について、その理論と方法を学びます。第２回は10月11日（木）に開催され、「評価とは何か」「評価の必要性」「評価シートの作り方」についての基本を学びました。第３回目は、10月25日（木）に開催され、実際に各地区交流センターで行っている事業を評価シートに従って評価する実習を行い、評価についてより具体的に学びます。

最終回のフォーラムは、11月23日（金）に江釣子地区交流センターで開催します。再び櫻井常也氏をお招きし、今後の北上市の地域づくりの課題について、これまでの講座で学んだ事業評価の成果品を基に、地域事業の考え方や計画づくりなどに関して意見交換を行います。

▲第１回自治組織のための地域づくり講座（公開講座）

▲第２回自治組織のための地域づくり講座

いわてNPO－NETサポートは本年度、岩手県の補助事業に採択された２つのまちづくり事業に取り組んでいます。景観保全や住みやすさ向上のため、地域住民や商店街と手を取り合った活動を伝えます。

県委託景観点検事業 展勝地・景観まちづくり実験 第１回ワークショップ開催

９月21日、展勝地・景観まちづくり実験の第１回ワークショップを実施しました。９月後半でも気温30℃を越す暑さで、参加した約30名の市民の皆さんは、汗だくになりながら将来の展勝地について議論を交わしました。大正時代の和賀展勝地計画を代表とする歴史的情報を基に展勝地を改めて見直し、景観から見た展勝地の将来像を見つけだそうという狙いがあります。

この日は前北上市立博物館長の本堂壽一さんと㈱展勝地代表の軽石昇さんの講話をお聞きし、珊瑚橋から東側の街並みや毘沙門天、陣が丘を中心に景観点検を実施しました。季節の影響もあり、総じて繁殖しすぎた雑木による眺望の妨げの指摘が多かった他、歴史的価値を次世代に継承する目的の案内板がないなどの指摘もありました。

撮影した画像は、白地図に景観チェックカードと共に貼り付けて景観マップを作成、景観カルテを作成した後、グループ毎に発表、参加者全員で成果を共有しました。

今後は作成した景観カルテを基に、画像処理や実際の修景を実験的に試みることによって、これからの景観まちづくりの方向性を考え、景観まちづくり活動の方針を検討しますので多くの皆様のご参加をお待ちしております。

【今後の予定】

第２回：10月23日(火)18：30～20：30
　立花地区交流センター（画像修景による景観評価）
第３回：11月16日(金)10：00～16：00
　立花地区交流センター（実験的修景による景観評価）
景観まちづくりフォーラム＆交流会
　：11月25日(日)13：30～18：30　展勝地レストハウス

（文責　高橋敏彦）

新交通システム社会実験 まちちゃり事業

放置自転車を活用して、商店街でレンタサイクルに取り組む新交通システム社会実験「まちちゃりプロジェクト」は９月にスタートしました。市内の商店主などにオーナーになってもらって店先に自転車を設置し、買い物や行楽の「足」として市民に無料で使ってもらっています。

現在、貸し出している自転車は十字路商店街の商店を中心に10施設計15台。利用方法はオーナーに氏名や連絡先、返却予定を伝えて、市内で自由に乗ってもらった後、元の場所に自転車を返すだけと簡単です。９月７日から９日までの諏訪神社1200年大祭にあわせて事業を始め、９月の利用件数は10台。これからＰＲを本格化させる予定です。

自転車は単なる交通手段ではありません。オーナーから借りるとき、お店の思わぬ掘り出し物に気付いたり、雑談が弾んで店主の温かい人柄に触れたりと、市街地の魅力を再発見することができます。自転車は、車社会の中では、すっと通り過ぎてしまいがちな、街の「笑顔」と出会えるツールです。

現在も、オーナーになってもらえるお店や施設は募集中で、利用者に対する商品割引など新たなサービスも期待しています。北上市も支援ネットワークをつくって環境整備に協力してくれています。これから先、「まちちゃり」がみなさんの笑顔をつなぐよう努力しますので、街で見かけたらぜひご利用ください。

（文責　菊池広人）

市民提案型協働事業「コラボ☆チャレンジ」

北上市では平成19年度に新たなまちづくりの方法として企業や団体が取り組むコミュニティー活動に対し、北上市が助成する市民提案型協働事業「コラボ☆チャレンジ」を創設しました。コラボ☆チャレンジには５団体から応募があり、公開審査会を経て同市の（株）小原建設と、ＮＰＯ法人「芸術工房」の事業がそれぞれ採択されました。取り組みを詳しく紹介します。

かけっこ体育館

・・・㈱小原建設（北上市）

就学前の子どもと保護者に体育館や遊具を自由に使ってもらい、子育てを支援する「かけっこ体育館」を、９月から市北工業団地の村崎野勤労者体育館で実施しています。

参加した親子は、市内のＮＰＯ法人「フォルダ」のインストラクターの指導を受けながら、バランスボールや家でもできる体操、遊びを楽んでいます。利用者は９月12日が約50人、14日は約90人と増え、１才の男の子を抱えるお母さんは「今まで体育館に来る機会はありませんでしたが、同じ年頃の子供と遊ばせることができるので、これからも参加したい」と感想を話してくれました。

体育館の指定管理者でもある小原建設は「市北部には子育て支援センターがなく、親から“親子で集う場所を”と切望する声がありました。また体育館の午前中の利用を増やしたかった」と話します。そんな願いどおりに、親子のスキンシップを図る場として定着してきました。少ない費用で、地域のニーズにあった事業を実施できる―。それが市民協働の醍醐味（だいごみ）だと担当者は実感しています。かけっこ体育館は、毎週水曜日と金曜日の午前10時～正午に村崎野勤労者体育館で開かれています。参加無料。ぜひ皆さんお越し下さい(^-^)ノ"

◀かけっこ体育館
参加者の様子▼

芸術公演活性化事業

・・・・NPO法人芸術工房（北上市）

公演主催者が一般市民に公演業務に関ってもらうことにより、観客の満足度や芸術への関心を高めてもらおうと、９月から「芸術公演活性化事業」をスタートさせました。

事業は、公演業務を手伝ってみたい市民と、手伝ってもらいたい公演主催者をそれぞれ募集した上で、①公演サービスに必要な客席案内・託児・身障者ガイドなどを研修し、②公演ＰＲのための鑑賞ワークショップの開催、③公演当日のフロント業務や託児業務、④観客や主催者へのアンケート調査等を担当するほか、⑤アーチストとの距離を近づけるため、参加者にリハーサルやほかの公演を鑑賞してもらいます。

これまで９月11日と13日にフロントの基礎研修、16日に託児研修、10月３日と４日にフロント研修の客席案内編を実施し、延べ35人の参加者が受講しました。一方、公演の申込みは４公演あり、その中から「北上フィルハーモニー管弦楽団」と「吹奏楽愛好会アンサンブルソノリテ」の定期演奏会の業務を手伝うことになりました。

参加者の間には、研修で学んだ接客や客席案内などのノウハウを業務で生かせるかどうか不安な様子もありますが、今まで気付かなかったサービスの深さを知り、「こんな心遣いがあったのか」「難しいけどやりがいがある」という声が聞かれます。今からでも参加はＯＫ。事業完了後も２年間はサポーターとして活動できます。

◀フロント研修の様子

託児研修の様子▶

広瀬川まちづくり倶楽部

山下　正彦
（広瀬川まちづくり倶楽部 事務局長）
（街づくり市民の会 事務局長）

▲広瀬川まちづくり倶楽部設立総会

▲ワークショップ

▲先進地視察報告

北上市中心部の繁華街を流れる広瀬川は、かつて何度も水害を引き起こし、農業用水や生活排水が流れ込んで汚濁が進んでいます。市が５億２千万円を投じて2008年度までに青柳町地区の川の整備事業に乗り出したのを機に、行政と協働し、広瀬川を生かした中心市街地の活性化と景観づくりを進めようと「広瀬川まちづくり倶楽部」を９月27日に発足しました。

市の整備事業は、広瀬川のうち「ぐんきん」の裏にある高砂橋から「赤喜」の前の昭代橋までの約400㍍を地下化し、その上に地下水の清流を流す計画。さらに、流域のうち万世橋周辺を「にぎわいのエリア」、上流の児童公園周辺を「安らぎのあるエリア」と２つに分け、せせらぎのある公園をつくる予定です。メンバーには地元の町内会や料飲店組合、ＮＰＯの有志が集まり、整備事業に加わりながら、広瀬川「生活・歴史・自然」学習会や先進地事例調査報告会の開催、「広瀬川まちづくり倶楽部」ニュースの区域全戸配布を予定しています。

整備事業に昨年着手するまでの３年間、市は計13回のワークショップを開催し、延べ100人の住民意見を集約した。その中で「魚が泳いでいる」「子どもが遊べる」「夜の賑わいを配慮して」などの意見が取り入れられている。先進地視察に参加したメンバーを中心に、まちの活性化や公園の維持管理のために団体が必要との声が上がり、結成につながったと聞きます。

広瀬川両端の道路沿いには、飲食店を中心に約100軒が並ぶが、環境悪化と歩調を合わせるように人出が伸び悩んでいます。「改修工事で潤いのある繁華街に生まれ変われば、人出は戻ってきます。みんなに親しんでもらえるよう市民の知恵を出したい」とメンバー、広瀬川流域は国土交通省が薦める事業である「日本風景街道」の候補のひとつにも登録されました。活発な意見交換によって、今後の北上市の繁栄の一助になることが期待されています。

ひとこと

広瀬川まちづくり倶楽部　会長　大川　正裕さん（黒沢尻第5区長）

広瀬川の改修工事は単に河川改修に留まらず、行政と市民が一体となった協働によるまちづくりでもあります。平成16年度以降、10数回にわたり多くの市民が参加しワークショップが行われ、改修工事のあり方を始め、完成後の「維持管理」や「まちの賑わいと人々の交流の場の創設」、「周辺の景観づくり」など、新たに創造される「都市空間・親水空間」への対応についても意見・提言をいただいております。私達は、こうした提言の具現化のため、「広瀬川まちづくり倶楽部」を設立しました。市民の管さんの英知とエネルギーを結集しながら、肩・肘はらず、自然体で、楽しみながら、新しいまちづくりに取り組んでいきたいと考えております。

ピュー・アニマートの会
代表 鈴木雅子さん

北上ミューズコーラス隊活動風景

みなさんは「ピュー・アニマート」という言葉をご存じですか？音楽用語で「ピュー(piu)＝もっと」、「アニマート(animato)＝元気に、生き生きと」という意味で、演奏家が少しテンポを早くしたり、少し音を大きくしたりするときに使われる言葉です。

「ピュー・アニマートの会」は、北上市内の児童・生徒で構成する「北上ミューズコーラス隊」(以下、「コーラス隊」という)の活動を「もっと元気に」なるようにサポートすることを目的とし、コーラス隊に参加する子どもたちの保護者を中心にしたメンバーで構成している団体です。

コーラス隊の人数は約50人で、1999年の北上市教育委員会主催の児童合唱団講座に参加した子どもたちを中心に結成され、2000年から定期公演をスタート。合唱やダンス、オペレッタを練習して、老人福祉施設の訪問公演や童謡歌唱コンクールへの参加、クリスマスコンサート、オペレッタ公演などの活動をしています。

ピュー･アニマートの会は、子どもたちの児童合唱団講座の開講に併せて1999年に結成されました。当初は子どもたちの練習の合間におやつを用意するくらいの活動でしたが、子どもたちの活動が活発になるにつれて内容も幅広くなり、今では年間活動計画の策定や指導先生の選任、練習場所の確保、パンフレット作成、チケット販売など、裏方としてあらゆる仕事を担っています。ミシンや裁縫の得意な人は衣装作り、お料理の好きな人は合宿時のカレー作り…と「できる人ができるくらい、自分の得意な仕事を率先してやる」というのが会のモットーです。

積極的な活動に周囲から「なぜそこまでやるの？」という声も聞かれます。子どもたちが一生懸命に努力する姿を観てきた者として、公演をとおして感動してくれる人がいることは、合唱のすばらしさと相まって感無量です。子どもたちの頑張る姿から私たちは、一生懸命になれたり、感動する機会をもらっています。大変な仕事はあっても、子どもたちの歌に感動してまた頑張れます。

私たちは、感動の涙を一緒に流せるメンバーが少しずつ増えていけばいいな。そして、コーラス隊の子どもたちがつくる音楽のすばらしさを伝えてくれたらいいな、と願っています。

ＮＰＯ基礎講座

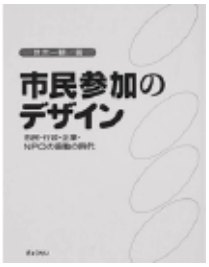
コーディネーターとファシリテーター

「コーディネーター」とは、
＊ワークショップ全体のプロセス、参加形態、プログラムを企画し、スタッフを集めてくる全責任者である。プロデユーサーでもある。
＊ワークショップの内容や進行を推進し取りまとめる。ファシリテーターと全体をとりまとめる役割もある。コーディネーターが兼務することが多い。

「ファシリテーター」とは、
＊ワークショップの進行役
＊ファシリテーターを直訳すると「援助者・促進者」という意味になる。（略）ワークショップに参加した人々が対等な立場で意見を言い合い、より民主的に会議が進んでいくように様々な工夫を行い、ワークショップをスムーズに進行していく役割である。（略）

「市民参加のデザイン」より

本の紹介



市民参加のデザイン
市民・行政・企業
・ＮＰＯの協働の時代
世古一穂著
ぎょうせい

この本は、NPOの入門的な内容で、いろいろな用語が、具体的に説明されている。

たとえば、何気なく使い、理解していたつもりの「市民参加」という言葉にも、八つの形態があること、市民参加で重要なことは「市民参加のデザイン」であることなどが実例を通して書かれている。

また、ワークショップについても、各地域の具体的な実例をもとに説明され、非常に分かりやすくこれからの協働型社会の実現に向けて、多くの人に読んで欲しい一冊である。

展勝地

九月十五日に北海道付近にあった秋雨前線が、十六日に東北北部に南下し、十八日にかけて東北地方に停滞した。十五日から十八日までの総雨量は花巻市豊沢で三〇〇ミリとなり、この大雨で北上川の水位は氾濫危険水位(四・一メートル)を上回る五・四メートル(男山観測点)を記録、展勝地の桜並木のツツジや紫陽花が見えなくなるまで水を被った。また小川が氾濫し立花小と二子小は休校せざるを得なかった。

時あたかも二子いも収穫の最盛期である。北上川流域の肥沃な土地につくり続けてきた二子里芋は肉質がまろやかで、ねばり・コク・舌ざわりの良さは抜群で一度口にすると、その味が懐かしくまた食べたくなると、どの人も言う。今年は、はやく頼まないと手に入らないかもしれない、と思い早速、知人や友人に送った。「ズボって何のこと」「親芋のまわりに子芋さらに孫芋が育って、孫芋のことを北上地域ではズボいもと言うの。皮つきのまま茹で冷めないうちに指で軽く押したときズボッと皮がむけるところからズボいもとも言うらしいの」「調理方法かと思ったら、クラス分けか」実は恥ずかしながら私もズボいものことを知ったのはつい四・五年前のこと。衣被ぎ(きぬかつぎ)＝里芋の子を皮のまま茹でたもの＝は一般的に知られているが、ズボいもを全国版にするのはもうちよっと時間がかかりそうである。

（み）

ＮＰＯ活動（市民活動）を支えるのは市民です。いろいろなサポートがあります。

特定非営利法人いわてNPO-NETサポートでは、会員及びスタッフを募集しています。

●正会員
活動に直接企画から参加。
活動情報が提供されます。
会費個人（年間） 6,000円
会員団体（年間）10,000円

●活動会員
活動のみ参加。
活動情報が提供されます。
会費個人（年間） 3,000円

●賛助会員
活動資金で協力します。

●ボランティアスタッフ
活動に関するご意見や情報提供

市民活動に関心のある方を
お待ちしています

発行 特定非営利活動法人 いわてＮＰＯ-ＮＥＴサポート
〒024−0061 岩手県北上市大通り一丁目３番１号おでんせプラザぐろーぶ３Ｆ
TEL 0197-61-5035 FAX 0197-61-5036 E-mail npo@npo2000.net URL http://www.npo2000.net

きたかみNPO通信 2007.10.1 NO.15